

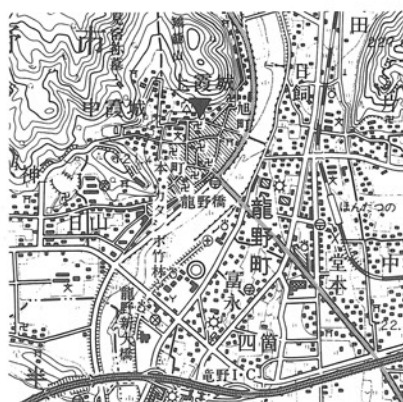


状態で出土している。土圧のため、竹の節が抜かれていたかどうかは、確認できなかったが、出土状態から、井戸の廃棄に際して、「息抜き」が行なわれた可能性が指摘できる。木簡もそれに伴って用いられたものと推察される。

なお木簡の釈読にあたっては、兵庫県立歴史博物館の小林基伸氏のご教示を得た。

(中川 猛)

兵庫・龍野城跡 たつのじょう



(龍野)

- 1 所在地 兵庫県龍野市上霞城
- 2 調査期間 一九八九年(平1) 九月～一〇月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 4 調査担当者 大村敬通・井守徳男・村上泰樹
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 一六世紀～一九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は兵庫県南西部の揖保川中流域末端の右岸に位置する。

龍野城は播磨守護職赤松氏の庶流である赤松村英によって、標高二三〇mの鶏籠山上の山城及び南麓の三の丸が築かれたとされる。赤松氏滅亡後、豊臣政権下の支配を経て、徳川政権下で元和三年(一六一七)の本多氏入封以降、城を山麓に移した。寛文二年(一六七二)に脇坂氏が五万三千石で入封して以

降、廃藩置県まで一〇代約二〇〇年間の支配が続いた。

調査は、神戸地方検察庁龍野支部の庁舎建替えに伴い、三〇五㎡の範囲で実施した。調査地は近世龍野城の下曲輪に当たる。

遺構は、下層では、一六世紀中葉頃とみられる建物など、上層では近世の建物、堀跡を検出した。遺物は各期とも多量に出土した。

木簡は、近世の堀跡の埋土中から三点出土している。堀跡は推定幅八m程度、深さ二mの箱堀で、木簡のほか、曲物底板・同側板・くさび状木製品・木栓・竹筒・土器・瓦などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「中井村米 (170)×(36)×7 0.19

(2) ・「< 田中萬作預り」
〔分カ〕米屋利右〔衛門カ〕
升取太〔郎カ〕

・「<御用米四拾四俵入 (180)×34×4 0.89

(3) 「渡辺九藏殿預り」
〔分カ〕米屋年寄伝左衛門
升取佐〔門〕
295×28×5 0.51

木簡はいずれもヒノキ材である。木簡の内容や、調査地付近には蔵が存在したことが絵図にあることから、貢租に係るものと考えられる。(1)の中井村は龍野市東部に存在する地名である。(3)の渡辺九藏については、寛政一〇年(一七九八)の城下町絵図に同名の

人物がいたことが記されている。

なお、木簡の釈読については、兵庫県立歴史博物館の小林基伸・小栗栖健治・松井良裕の各氏にご教示・ご協力をいただいた。

9 関係文献

兵庫県教育委員会『龍野城―神戸地方検察庁龍野支部庁舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』(一九九〇年) (井守徳男)

